

# 聖なるものの形とマンダラ

立川 武蔵

国立民族学博物館

## 1 宗教を理解するための操作概念

「聖なるもの」(the sacred)と「俗なるもの」(the profane)という一組の概念についてまず考察したい。この一組の概念は宗教現象を考察するための操作概念として有効と思われる。この二概念によって宗教の全体構造の枠組を明らかにすることができるという前提に立って以下の考察を始めたい。

この二概念の指し示すものはそれぞれの宗教において異なっている。だが一見遠くかけ離れていると思われるさまざまな宗教現象にも共通して二つの「層」が存在する。その二つの層は、時としては宗教現象を明確に二分するようなかたちで現れるが、時としてはその二つの層は交わり一つとなることもある。その二層を「聖なるもの」と「俗なるもの」と呼びたい。

さまざまな宗教形態を統一的に理解するための学的概念として「聖なるもの」と「俗なるもの」という二つを設定し、それを諸宗教に共通した構造を解明するための基礎概念へと育てようと思うのである。宗教が、自然(あるいは原始)宗教、民族宗教、世界宗教という三種に分類されたことがあった。この分類の仕方は今日でも意義を失ってしまったわけではないが、われわれはこの三種への分類とは異なった方法によって宗教を考察しようと企てている。その考察のための装置の一部として「聖なるもの」と「俗なるもの」の二概念を用いようというのである。特にこの小論のテーマであるマンダラを扱うためには、われわれはマンダラを重要なシンボル装置とする密教あるいはタントリズムと呼ばれる複雑な宗教形態を扱わざるを得ない。密教はそれ以前の形態とは異なる宗教形態と融合したものである。それゆえに、それらの二つの宗教形態を統一的に説明する概念を持つ必要がある。そのような幅の広い概念としては「聖なるもの」と「俗なるもの」という概念はすこぶる有効と思われる。

## 2 個人的宗教行為と集団宗教行為

宗教的行為としてのヨーガを考えてみよう。ヨーガにおいては身体的、言語的および意的行為の全てが止滅すべきである。つまり、身体を動かさず、話しもせず、心も動かない状態になってはじめて、ヨーガ行者は自分自身に靈我(純粹精神)あるいは悟りの智慧は「聖なるもの」として機能し、一方、行者が滅すべき身体的、言語的および意的行為は「俗なるもの」として機能すると考えられる。ここでは、靈我等はそれを手に入れることが望まれている好ましきあるいは良き「聖なるもの」であり、身体の活動等はそれの止滅が望まれている、汚れた否定さるべき「俗なるもの」である。このような好ましき良きものを「浄なるもの」と呼び、汚れた否定さるべきも

のを「不浄なるもの」とも呼ぶことにしよう。ヨーガの行法に関するかぎりでは、「聖なるもの」と「浄なるもの」は一致し、また「俗なるもの」と「不浄なるもの」は一致すると言えよう。なおヨーガは本来的には一人の実践者が霊我あるいは悟りの智慧を得ようとする行為であり、集団あるいは社会全体が取り組んでいる行事などではない。

ヨーガにおいては「不浄なるもの」つまり止滅させられるべき「俗なるもの」と「浄なるもの」つまり手に入れるべき「聖なるもの」との間に明確な区別があるが、仏教あるいはヒンドゥー教において、この宗教における二極としての「聖なるもの」と「俗なるもの」との間の距離が縮小あるいは同一視される場合がある。「煩惱即菩提」つまり心の汚れ(煩惱)は悟り(菩提)であるという表現がしばしば聞かれる。この考え方では「不浄なる俗なるもの」としての煩惱は、「浄なる聖なるもの」としての悟り(菩提)とが同一視されており、先述のヨーガの行法と対照的な構造を有している。『般若心経』における「色即是空、空即是色」という表現も「煩惱即菩提」と同様の考え方を示していると考えられる。『般若心経』における「色」とは結局は迷いの世界のことをいい、「空」とは真如の意味であるからである。

このように「聖なるもの」と「俗なるもの」とは、宗教現象の全領域を補集合的に二分するものではなくて、時には重なったり交わったりすることもある流動的な二つの層と考えられる。

ヨーガの行法や『般若心経』が勧める般若波羅蜜多(智慧の完成)という実践は、基本的には個人の精神的救済を求めるものであるが、宗教行為の中には個人の精神的救済を求めるというよりは、集団・社会的機能をより強く有する宗教行為が存する。例えば、葬儀という集団の宗教行為を考えてみよう。ある集団において死者が出る以前は日常的な「俗なる」雰囲気が支配的だが、死者が出るとその集団は非日常的な雰囲気に包まれる。生き残った者たちは死者つまり死体と一緒にそれまでのように暮らすことはできない。危険で「不浄なる」死者をどうにかして別の世界へと送ってしまわなくてはならない。死体は肉親の最後のすがたを留めているゆえにいいおいしいものではあるが、危険で不浄なる気を噴き出している存在だ。葬儀は不浄なるものとしての死者を浄なるものとする浄化作用、あるいは少なくとも無害なものとする作用を有する行為である。

死者が浄化されて別世界へと送りとどけられた後、生き残った者たちは再び日常の俗なる、つまり特別のことがない世界へと戻ってくる。ここで注意すべきは、葬儀の場合には浄なるものと不浄なるものは二つながら「聖なるもの」の領域にあることだ。またこの場合の「聖なるもの」は、崇高や神聖といった意味よりも非日常的なものという意味が強い。この場合の「俗なるもの」とは、俗悪、低俗という意味よりも特別の事件がおきていない無緊張の日常という意味が強いのである。

以上われわれはヨーガと葬儀という二種の宗教現象において「聖なるもの」と「俗なるもの」という二つの概念の意味が大きく異なっているのを見た。そうであればこの二種の宗教行為はむしろ異質のものとして扱い、両者を共通した基礎概念によって理解しようとするのはむだな試みなのではないか。「聖なるもの」と「俗なるもの」という基礎概念の側面の違いを強調してまでそれらの二概念を用いる理由は何なのかという疑問が生れることであろう。

しかしながら、わたしは「聖なるもの」および「俗なるもの」という二概念を場合によって異な

る意味に用いているのではなくて、元来含まれている側面が現象の展開に従ってハイライトされるにすぎないと思う。個人的宗教行為と集団的宗教行為は現実の宗教形態においては混合というよりは統一されている。その統一は「聖なるもの」と「俗なるもの」が今述べたような幅広い内容を有しているゆえに可能であったと考えられる。このような考え方にわたしを導いたのは、タントリズム(密教)における実践・儀礼のあり方であった。

例えば、ホーマ(護摩)をとりあげてみよう。ホーマつまり火への奉獻はヴェーダ祭式の代表であるが、この儀礼はバラモンたちがティームを組んで行うのが一般的であり、その目的は子供の誕生、病気の治癒などである。すなわち、個人の精神的救済としての悟り、解脱を得るためのものではない。ホーマにおける「ヴェーダ的」(vaidika)と「世間的」(laukika)との厳密な区別は、われわれの言葉で言うならば「聖なるもの」と「俗なるもの」との区別ということができよう。結界されたつまり聖別された儀礼場の中に並べられたすべての道具が「聖なる」水などによって浄化された後、また別の仕方では聖別された供物(バター油と餅)は火神アグニへと投じられるのである。

ところで、後世の仏教タントリズムは元来はヴェーダの宗教の儀礼であったホーマを自らの体系の中に組み入れた。仏教タントリズムとはいえ、仏教である以上、悟りを得ることが最終目標としてかけられていた。しかし、ホーマはすでに述べたように悟り・解脱などを得るための行為ではない。仏教タントリストたちは、火への奉獻あるいは献供という外的行為を精神化あるいは内化しようとした。つまり、外的には火の中へ供物を入れるという行為が「内的には」すなわち心の中では心の汚れ(煩悩)を焼く修行であるとみなしたのである。その結果、元来は集団的宗教行為としてのホーマが個人的宗教行為としての意味をも有することになる。タントリストたちはこのように新しい意味を附加することによって自分たちの宗教形態を時代の状況に合わせてしようとした。マンダラもまたこのような意味の読みかえという作業の中から生れてきたものなのである。

### 3 「聖なるもの」

「聖なるもの」についてのこれまでのわたしの説明は、キリスト教徒、ユダヤ教徒さらにはイスラム教徒にとっては神の尊厳を軽んじているように聞こえたかもしれない。『旧約聖書』における「聖性」(コーデーシュ)や「聖なる者」(カードーシュ)という語は今わたしが述べたように悟り、死者、儀礼場などを指すというよりは、特に神ヤーヴェー(イエホーヴァー)に対して用いられる特別の語であるからだ。ここにわたしがいう「聖なるもの」とはヘブライ語のカードーシュよりも一層広い意味に用いていることをまず指摘しておきたい。「コーデーシュ」や「カードーシュ」という語が派生した動詞「カーダシュ」の原意は「区別されること」といわれる。このことは『旧約』における「聖なるもの」の意味の中核を語っていると思われる。

ドイツの宗教哲学者ルードルフ・オットー(1869～1937)はその著『聖なるもの』Das Heilige(1907)において『旧約』の神を中心に考察して、元来は『旧約』学概念であった「聖なるもの」を宗教哲学あるいは宗教学的な操作概念へと育てた。オットーはヒンドゥー教特にヴィシヌ教

に関しても多くの著作を残しており、「聖なるもの」という概念がユダヤ・キリスト教的伝統以外の伝統にも適用可能であることを示唆している。さらに、ルーマニアの宗教学者であり晩年はシカゴ大学教授であったミルチャ・エリアーデ(1907~1986)やフランスの宗教学者ロジェ・カイヨワ(1913~1978)たちの仕事によって「聖なるもの」と「俗なるもの」という一組の概念はユダヤ・キリスト教的伝統に対してのみではなく、宗教現象一般に対しても有効であると考えられるようになった。今わたしが用いている諸概念はこれらの先駆者たちの仕事に基づいてはいるが、エリアーデやカイヨワの用法そのままに用いているわけではない。

日本では「ハレ」と「ケ」という一組の概念が用いられてきた。例えば、正月のような特別の時をハレといい、日常の時をケと呼んできた。この二概念は、正月とか地域の祭りとかさらには結婚式といった集団帝宗教行為・行事の場合に際して、特別の時と日常の時との区別を表わすには有効な概念かもしれない。しかし、ハレとケという概念によって、ヨーガ、念仏、禅、マンドラ瞑想法などのいわば個人的宗教実践の構造を明らかにすることはほとんど不可能だ。したがって、われわれはハレとケの意味領域を含む、より広い概念を必要とするのである。

わたしは「聖」「俗」という語を用いず、「聖なるもの」「俗なるもの」という語を用いている。「聖なるもの」とはある文化的、宗教的伝統において歴史的につちかわれてきた意味であり、その意味が与えられたものである。例えば、樹木、石、彫像などに「聖なる」意味を与えることによって、すなわち「聖化」することによって、その樹木等は「聖なるもの」となる。このように「聖なるもの」とは意味のみではなく樹木、石等のものをも指すことが多いために、「聖」という漢語よりも「聖なるもの」というように「もの」という単語を用いた方がより適切と思われる。「聖なる」力あるいは意味が問題となる場合には「聖性」という語を用いたい。

「聖なるもの」の内部構造あるいは「聖なるもの」と「俗なるもの」との関係を示すために「浄なるもの」と「不浄なるもの」という概念を設定したが、これでも充分ではない。葬儀の場合にはかの二組の概念によってある程度説明がつくかもしれない。しかし、例えば宗教的な雰囲気を伴ってなされる結婚式を考えた場合には「浄なるもの」と「不浄なるもの」との区別というよりも社会的には「認知される前」と「認知された後」との区別がよりいっそう顕著となる。宗教的には「聖別される前」と「聖別された後」の区別ということができよう。結婚式にあっては「不浄なるもの」や不吉なものは極力遠ざけられ、「聖なる」力あるいは意味の附与が行われる。その附与が夫婦としての社会的認知がなされるための節目となる。

#### 4 「聖なるもの」の形

「聖なるもの」の形とは、ヒンドゥー教や仏教においては結局のところ人間をも含めた自然界のあらゆるものの形である。腕が4本以上あったり4面であったりする神も登場するが、彼らもわれわれ人間の形からそれほど異なっているわけではない。ユダヤ教やイスラム教と異なり、ヒンドゥー教および仏教では形あるものが「聖なるもの」として崇められることは一般的だ。「聖なるもの」が形を採るというよりも、現象界のあらゆるものが「聖なるもの」となり得るというのが、インドの宗教の一般的特質である。というのは、インドの宗教にあっては神と世界さらに

は人間がほぼ同一のものであるからだ。『旧約』の神ヤーヴェーや『コーラン』の神アッラーは被造物としての世界を超越したものであり、自らの姿を人形のイメージによって表現することは禁じられた。神の力が被造物に行きわたっていることは認められてはいるが、被造物を神あるいは神の形そのものとみなすことは、ユダヤ・キリスト教的伝統にあつては神の尊厳を損なうことだと考えられた。

しかしながら、インドの宗教、特にタントリズムにおいては、形あるものがしばしば「聖なるもの」と考えられる。『般若心経』の「色即是空」は、後世、中国や日本において「いろ・かたちあるものすなわち現象世界は真如(空)である」と解釈された。このようにいろ・かたちあるものが真実そのものであるというのは、インドの宗教史において最後に現れたタントリズムの基本的な考え方の一つである。この考え方は、かの宗教における二極という概念を用いるならば、「俗なるものは聖なるものであり、聖なるものは俗なるものである」といえよう。タントリズムにおけるシンボル装置であるマンダラには今述べたような考え方が根底にある。

宗教におけるかの二つの極は無媒介的に同一というわけではなく、「俗なるもの」がどのような道筋をたどって聖化されて「聖なるもの」となるのか、が問われなければならない。その聖化のプロセスは個々のマンダラの伝統に従って明らかにされる必要があろう。換言すれば、この世界における不浄なもの、例えば心の汚れ(煩悩)血、骨、皮、死体といったものが浄化されるプロセスが時間の観点を失わずに個々のマンダラの伝統に沿って問われる必要が存するのである。

## 5 マンダラ

インドで生れたマンダラにはすでに千数百年の歴史がある。この間にマンダラの形態や機能も大きく変化した。初期のマンダラは小さな仏像などを載せた盆状の祭壇であったと推定されている。七世紀頃にはマンダラは地面に色付きの粉によって描かれ、その中であるいはその前で弟子の入門儀礼が行われた。マンダラがメール山(須弥山)を中心とした世界図を踏まえるようになるのは九世紀以降のことであった。マンダラが世界図としての意味を有した後は、マンダラは大宇宙(世界)と小宇宙(実践者の心)の本来的同一性というインド古来の精神を体得するための補助装置となった。シンボルのネットワークそのものであるマンダラを行者は動かして自己と宇宙との同一性を追体験しようとしたのである。

マンダラの中にはそれほど奇異なすがたの怪物がいるわけではない。メール山頂に建てられた宮殿の中に仏や菩薩が整然と並んでいるのみである。時としては仏や菩薩は法輪、金剛などのシンボルによって表現される。これらの人形あるいはシンボル形の仏や菩薩は、怒り、むさぼり、無知といった心の汚れの象徴(シンボル)であるとみなされる。より正確にいうならば、心の汚れが浄化されて仏・菩薩のすがたとしてマンダラに並ぶのである。

またある種のマンダラには、血で充たされた頭蓋骨杯を持ち、人骨で作った飾りをつけ、象あるいは人間の生皮を被り、しかも妃と交わったすがたの仏世尊が登場する。このようなイメージがどのようなプロセスを通して成立したかはまた別の問題であるが、今のわれわれの考察にとって重要な問題はタントリズム以前の仏教が忌み嫌ってきた血、骨、皮といったいわゆる不

浄なるものが、仏の位を得た者つまり世尊のイメージをかたちづくっていることだ。日常にあつては避けられるべきこれらの恐しきものを浄なるものへと変質させているのである。

この場合、血、皮、骨といったものが他のもの、例えば花、金剛、鏡といったものに置き換えられるのではなくて、血、骨、皮などはそのままに仏の持物や身体の飾りとなる。しかも、その恐しき仏のすがたには一種の美しさや尊厳さが備わっている。これは仏教タントリズムが血・骨・皮などの儀礼の要素を個人の精神的救済を求める型の宗教の中に組み入れた結果と考えられる。恐しき秘密仏のそれらの持物は、かつては集団的宗教行為における「不浄にして聖なるもの」が個人的宗教行為をも視野に入れた体系の中にとり入れられたために「不浄にして俗なるもの」とまず把握され、次にそれが「浄化、聖化」されたために「浄にして聖なるもの」としての意味を与えられたといえよう。

このようにマンダラに登場する仏や菩薩たちは、多面多臂のイメージを有することもあるが、所詮、人間あるいは動物のイメージに基いたものであり、別段珍しいものではない。彼らが「聖なるもの」のイメージを有すると理解されるのは、ひとえにそれらに「聖なるもの」としての意味が与えられるからである。

では、「聖なるもの」の意味の源泉はどこにあるのか。それは「聖なるもの」と「俗なるもの」との区別を意識することにある。もしもセム系の一神教の場合であればその区別は神とそれ以外との区別として現れるであろう。だが、仏教タントリズムにおいては、「俗なるもの」の否定によって「聖なるもの」が顕現するというかたちでかの区別が現れる。マンダラに整然と並ぶ仏や菩薩は「俗なるもの」のシンボルであるかぎりにおいて彼らは少なくとも一度は死ななくてはならない。すなわち、「不浄なる俗なるもの」は止滅することによってその後に彼らの再生を期するのである。マンダラに並ぶ仏や菩薩たちは否定の後によみがえった、つまり聖化されたすがたを示しているとも解釈される。実践者がどの階梯にあるかによって、仏・菩薩が煩惱のすがたを見せるのか、煩惱をなくした者の浄なるすがたを見せるかが異なってくるのである。

マンダラ儀礼が終った時、マンダラは破壊されねばならない。マンダラもまた空なるものであり、否定さるべきものであるからだ。マンダラの中の仏・菩薩も、そして彼らの住む宮殿も、さらにメール山さえも究極的には否定されて空となり、最終的には光そのものとなることを仏教タントリズムは求めている。

## [Abstract]

## Forms of the Sacred and Mandalas

TACHIKAWA Musashi  
National Museum of Ethnology

The concept of “sacred forms” was originally nurtured in studies of the Old Testament, and in the twentieth century, R. Otto and others in the field of religious studies have shown it to be a valid operating concept. Furthermore, M. Eliade and R. Caillois, using the contrasting concepts of “the sacred” and “the profane,” have attempted to explain religious phenomena in general terms. Today, one can think of these contrasting concepts as being suitable for understanding not only the Jewish and Christian traditions, but also Hinduism and Buddhism. These two concepts are particularly effective in religions where many diverse forms are unified into one, such as *Mikkyo* (Tantrism).

*Mikkyo* is not just Buddhism, but also contains components of Hinduism and Jainism. It is a synthesis of pre-existing divergent religious forms. For example, esoteric Buddhism is a blend of pre-Buddhist regional forms of worship centering on non-Aryan rites involving blood, bones, and skin. Mandalas are products of this synthesis.

One could say that religion is the mixed practice of being conscious of the distinctions between “the sacred” and “the profane.” Religious acts can be divided into two types: individual religious practice seeking spiritual bliss, as the repetition of sacred names (*nenbutsu*) or Zen, and group religious acts such as *homa* (J. *goma*; making offerings to fire) and funerals. In the case of individual religious practice, the practitioner is to be negated as an “impure” profane thing, and gods and Buddhas, as well as *satori*, are to be acknowledged as “pure” sacred things. However, in group religious practices, in general both impure and pure things exist among the sacred; the profane signifies what is not worshipped-the ordinary. For example, at funerals, by the fact that the deceased person comes into existence, everyday, profane time becomes extraordinary, sacred time. In the course of a funeral, the impure things originating in the deceased are cleansed away, and as the living beings return to the profane world, the deceased is sent off to a separate sacred world.

Mandalas are formed of two parts: the forms of Buddhas and Bodhisattvas and the receptacles in which they reside. It is assumed that early mandalas consisted of small Buddhist images placed on plates, but in later ages came to signify the world centered upon Mt. Sumeru and the Buddhist worship hall built at its summit. In addition to being tools for individual worship to realize the spirit of ancient India in which the “great universe” (the world) and “small universe” (the heart of the practitioner) are originally united, mandalas are also symbolic devices for group worship practices such as memorial services and pupils’ initiation rites.